

野生動物研究センター

I	研究の水準	研究 37-2
II	質の向上度	研究 37-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 論文発表数は、平成22年度の25件から平成27年度の93件、国際学会での発表は平成22年度の46件から平成27年度の91件、国内学会での発表は平成22年度の48件から平成27年度の125件となっている。
- 科学研究費助成事業により、平成22年度から平成26年度に68件の研究を実施している。
- 平成24年度から寄附講座（福祉長寿研究部門）を受け入れ、チンパンジー、ボノボの飼育施設である熊本サンクチュアリにおいて、動物の長寿・福祉の研究に取り組んでいる。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 共同利用件数は、平成22年度の36件から平成27年度の94件となっており、動物園、水族館に所属する研究員や飼育担当者の研究を支援している。また、マスメディアで紹介された件数は、平成22年度の31件から平成27年度の67件となっている。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、公募による研究助成を38件、施設等の利用による研究を56件実施している。野外観察施設（幸島観察所・屋久島観察所）の年間の稼働率は、2施設平均72%、延べ2,514名が利用している。国内で最も多くのチンパンジーと唯一ボノボを飼育する熊本サンクチュアリは、年間を通じて研究活動が行われており、平成26年度は延べ340名が利用している。

以上の状況等及び野生動物研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に自然人類学の細目において特徴的な研究成果があり、チンパンジー社会における適応的な行動を明らかにしている。
- 特徴的な研究業績として、自然人類学の「チンパンジーの長期野外観察による社会と生態の研究」があり、チンパンジー社会においては母親のサポートが、子供の生存率に影響を与えることなどを明らかにしており、マスメディアで取り上げられている。

以上の状況等及び野生動物研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、野生動物研究センターの専任教員数は11名となっている。

学術面では、提出された研究業績1件（延べ2件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 共同利用件数は、平成 22 年度の 36 件から平成 27 年度の 94 件となっている。
また、動物園や水族館における研究は、平成 23 年度の 12 件から平成 27 年度の 35 件となっている。
- 「動物園大学」の研究会を平成 23 年度から毎年開催するなど、動物園や水族館での共同研究を推進し、動物園、水族館に所属する職員による研究支援を行っており、動物園、水族館に関する研究発表数は約 50 件となっている。
- 動物園、水族館との研究連携協定は、平成 27 年度末で 10 動物園、6 水族館となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 野生動物や飼育下の動物の保全等で成果があり、「チンパンジーの長期野外観察による社会と生態の研究」では、チンパンジー社会における適応的な行動を明らかにしている。

以上の第 2 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果を勘案し、総合的に判定した。